法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

トンガ調査覚書 ： サモア産ファインマットを追って

YAMAMOTO, Matori / 山本, 真鳥

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
80
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
289
(終了ページ / End Page)
307
(発行年 / Year)
2013-03-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008652

【研究ノート】

トンガ調査覚書[1)]
――サモア産ファインマットを追って――

山　本　真　鳥

1）はじめに
2）サモアのファインマット生産活動の変遷
3）トンガ社会とファインマット
4）女性財の生産
5）女性財の保持と儀礼
6）おわりに

1）はじめに

著者がサモア社会のファインマット（細編（こまあ）みゴザ）の儀礼交換を研究したのは30年ほど前のことである。現金経済（市場経済）が浸透しつつあるものの，サブシステンス経済がまだ生きていて，儀礼交換が盛んに行われていた。ファインマットは儀礼の場で互酬的に交換されるものであるが，一方で儀礼を遂行するために銀行から借金をしたり，儀礼の中で現金を贈るコンテクストがあったり，儀礼のために現金との交換でファインマットを入手する場面も存在し，現金経済の浸透と共に儀礼も発展していることが理解できた。その後，筆者は著書（山本・山本 1996）の出版を経て，折に触れファインマットを横目で見ながら，サモア社会を多元的に調査して

地図１　南西太平洋

きた。本論でサモアというのは，サモア独立国をさしている。アメリカ領サモアは同じ言語・文化を共有していたが，宗主国を異にしたために現金経済の浸透がなお著しい。

2011年度にサバティカルを得る機会を得て，再びファインマットの研究を思い立ったのだが，それは，2003年頃から，それまで儀礼交換に関与していなかったサモア独立国政府が，文化政策と開発計画をからめてファインマットについてさまざまな施策を行うようになったからである（山本 2005: 310-312）。

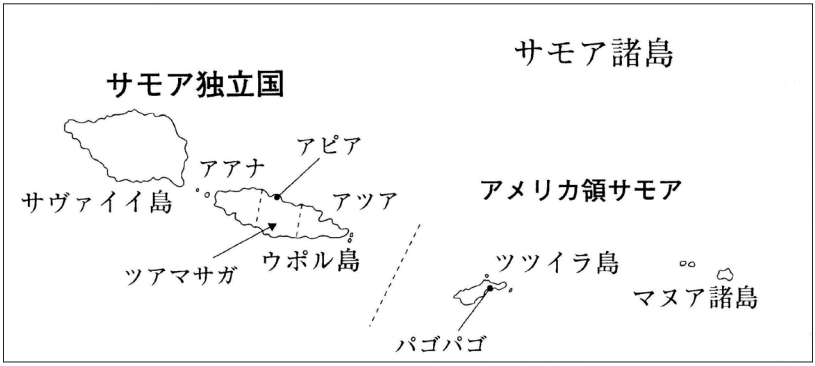
それに先だって，Women in Business Foundation（WiBF）というNGOが，女性の現金収入創出活動として，上質のファインマットを製作して，村落地域の女性の安定した現金収入を創生する仕組みを作った。その活動にいわば先導されて，女性省を中心としてファインマット復活運動が進行した。ところがファインマットの製作は大変時間もかかり，細かな神経を使う仕事で，女性省の作った規格通りのファインマットを編むことのでき

る女性はそう多くないし，できる女性も１人で１年に１～２枚しか作ることができない。その数少ない極上のファインマットの顧客としてトンガ人が目立つという話をWiBFで聞いた。

そこで，サモア人も入手をためらうような高価なファインマットを本当にトンガ人がサモアから買っているのか，またそれはいったいどういう理由なのか，それを合わせて，トンガの社会状況や儀礼財の使い方のサモアとの違いを追究するためにトンガでのフィールド調査を企画した。調査は2012年８月22日から９月７日までの日程で行われた。

2）サモアのファインマット生産活動の変遷

ファインマット[2)]は，サモア人にとってアイデンティティともいうべき貴重な宝であり，財である。これを儀礼において贈与するのがしきたりとなっている。この製作には女性が従事し，作るのに数ヶ月から１年と大変長い時間がかかるものだった。ただし，儀礼で贈与されたファインマットはまた別の儀礼で贈与することができるので，社会の中で循環していることになる。ファインマットはほぼ使用価値がなく，通常は寝具の下などに保存され，次の儀礼の際の登場を待つばかりだ。



地図２　サモア諸島

19世紀のサモア社会の記録からは，トガとオロアという2種の財があり，トガ財は女性の生産するファインマットや寝具ゴザ，タパ[3]，ココヤシ油[4]等，オロア財は男性の生産するブタやタロイモ等の食料，武器，道具類等（山本・山本 1996: 43, 106）とされている。現代においては，食料に加えて現金がオロア財の代わりに多用されるようになっているが，これらの財のカテゴリーは変容しつつも守られ，親族間の婚姻関係を軸に，妻方からはトガ財が, 夫方からはオロア財が多く贈られるようになっている。

儀礼の際の贈与交換はかつてより行われていたと思われるが，おそらくは第二次世界大戦後に盛んに行われるようになった。その契機は，第二次大戦後にサモア人の海外移住が始まったことにあるだろう。海外移民がこの儀礼ネットワークに組み入れられるようになるに従って，その数がエスカレートするのと共にファインマットの品質は粗悪化した。その数はとどまるところを知らず，海外ではファインマットを輸送するためにコンテナ車が動員されるほどであった。また，トガ財／オロア財というカテゴリーの別が，妻方／夫方という親族関係に沿うよりも，国内では村落地域／アピア市，海外も含めた場合，サモア国内／海外のように現金にアクセスのある地域から現金が流入すると共に，海外にファインマットが流れていくという互酬的なモノとカネのフローが成立するようになった。それに伴って，ファインマットの粗悪化が進行した（山本 2007: 130-131）。1年もかけて作ることはほとんどなく，1週間，3日と短縮して，1990年代には1日で仕上がる程度のものまで出現した。

ファインマットを買うことはかまわないが，ファインマットを売るのは見苦しい（みっともない）行為と考えられている。ファインマットを増産した女性たちの中には市場でマットを売ったり，売る人に卸したりすることもあったが，特にそのような売買でなくとも，儀礼交換によって贈与しなくてはならない場面はよく来るので，贈与を通じて互酬的に手放すことも多かった。必要に迫られて儀礼で贈与すれば，お返しに現金や食料が返ってくるし，儀礼のために必要な人に乞われて与えれば，現金をお礼にく

れたり，その人が儀礼でもらった返礼を持ってきてくれたりするからである。海外ではほとんどファインマットの生産は行われないが，儀礼を通じて海外に流出したファインマットがサモア移民の間に滞留して，海外での儀礼交換は本国のそれを凌駕する量で交換されていた（山本 2007: 123-126）。

その動向に変化をもたらしたのは，Women in Business Foundation というNGOがファインマットを女性の現金収入として位置付け，極上のファインマットを製品化する道筋を作ったことに始まる。後になってサモア政府は，ファインマットのかつての品質を取り戻すべく，その技術の保護・移転，生産運動の強化を行うようになった。

WiBFは，ファインマット製作の名手を探し，技術を学ぶワークショップを開催し，編み手を訓練した。そして，編み手が１枚仕上げるのに半年から１年かかるのだが，その間に編み手が定期収入を得られるシステムを構築したのである。まずは買い手から注文を受け，買い手と編み手を結び合わせることをWiBFが行う。現在の価格で一級の品質のものが5000ターラー（サモア•ドル）[5] 程度，二級が4000ターラー，三級が3000ターラーである（ファインマットの規格については，p.295参照）。買い手は２週間に１度WiBFに決められた額を払い込む。WiBFは，編み手を２週間に１度訪問して作業の進捗を確かめ，その成果に応じて編み手の口座に給料を払い込む。こうして編み手はまともに作業を継続している限りにおいては定期収入を得ることができるのである。

このような仕組みは，それまで不安定だったファインマットの製作を安定的な仕事として位置付けることに役立った。もともと高級なファインマットを仕上げた時には多額の収入を得ることが可能であったが，市場に出すためには，互酬的交換に付すべきものとしてファインマットをねらう親類縁者や首長，牧師等の勢力の攻勢を払いのける必要があった。また大金が懐に入ったときにその収入を鵜の目鷹の目で待つ近親者から全金額を守ることもなかなか難しい[6]。WiBFの方式であれば，２週間毎に入ってくる

写真１　政府役人の視察に際し，コミティの活動で完成したファインマットを見せる。サモア独立国，サヴァイイ島にて，2011年撮影。

収入を生活費に位置付けることも，子どもの授業料に位置付けることもでき，安定的な生活設計の道筋を作ることが可能となったのである。また，ファインマット製作が現金収入の一手段であることもアピールしたので，WiBFのプログラムの外で，半年後や１年後を楽しみにファインマット作りに励む女性も出てきた。この流れは主に女性省の活動と結びつく。

もともと，村落地域の女性は，教会の信者グループや，婦人会の組織の一環で，週１度集まってファインマットを作る会を開催していることが多い。女性・コミュニティ・社会開発省は，古くから関わってきたコミティ（Women's Committee）のネットワークを生かしたてこ入れを行った。これは，コミティや関連のファインマット製作グループを定期的に役人が訪問して，作業の進展を記録して女性たちを励ますという方法である。具体的な作業プログラムは存在していないが，この活動を通じて生産されたファインマットはさまざまなネットワークを通じて国内の富裕層の手に渡る

ようになってきた。

サモア政府はファインマット復興に際して規格を設けている。サモアの政府部内やWiBFでは，本物のファインマットとして *'ie sae* という語を用いているが，まだ十分サモア国内でも普及していない。その定義は以下の通りである。*lau 'ie*という種類のパンダナスの葉を，干してゆでてから塩水にさらすなどして白くし，その後葉をよくしごいてから，表と裏に分けて割き，表だけを用いる[7)]。その葉肉をとった薄い紙のようなものを細く割き，２本の繊維のそれぞれの内側を合わせて艶のある側を外に向けて斜めに平織りにして仕上げる。サイズは９アガ×12アガ（１アガは，手の親指と小指を一杯に広げた長さ）。繊維の幅が1.5ミリのものが１等級，2.5ミリのものが２等級，３ミリのものが３等級となる。このような規格ができるずっと前からある骨董品的なファインマットは，サイズ以外にはこれらの規格を十分満たしている。

ただしそれらの上質ファインマットが一般の儀礼に出回るということは少なく，多くは大きな葬式や結婚式のために退蔵されている模様である。政府が2003年にファインマット復興キャンペーンを始めたときに，首相が粗悪品ファインマット（*lalaga*）を使わないよう呼びかけを行った。ララガは，横２メーター縦１メーターくらいの大きさで，葉の表裏を分けず，編み目も７ミリ程度で，全体にごわごわしている。当時は10枚一束として贈与されるようになっていた。そのキャンペーン以来，比較的早くララガは儀礼の場から姿を消したが，その後代わりに上質のマットを１枚だけ贈るという首相の呼びかけの後半部分はあまり実行されず，復興キャンペーンで誕生した上質ファインマットの代わりに巨大サイズのファインマット，*'ie tetele* がもっぱらに使われるようになっていた。イエ・テテレはララガの数倍の大きさの巨大マットであるが，品質はララガに近いものがある。中には明らかにララガを何枚か組み合わせて作り直したイエ・テテレも散見された。

このような経緯で，必ずしも上質ファインマットの普及は進んでいない

が，しかしWiBFの扱う上質ファインマット購買プログラムの参加者にはトンガ人が多いということだ。

3）トンガ社会とファインマット

トンガ諸島はサモア諸島の南に存在する亜熱帯の諸島であり，古くから王権が栄えた場所として知られている。サモア諸島が火山島であるのに対して，北のヴァヴァウ諸島を除いて珊瑚礁や隆起珊瑚島の小さい豆粒のような諸島群が連続して並んでおり，総面積は748平方キロメートルで，サモアの1/4に相当する。その割に人口が多く，サモアの約７分の４である。南端のトンガタプ島に首都ヌクアロファが置かれている。

地図３　トンガ

トンガは1773年のキャプテン・クック訪問以前から相当長きにわたって，王制の栄えた土地である。王を中心にピラミッド型に首長が配置され，平民が底辺を形成する社会となっていた。クック訪問後の19世紀初頭に，武力衝突が頻発する「戦国時代」に突入するが，やがて王族の一人であるタウファアハウ

がメソジスト派の宣教師らの助力を得てトンガ統一を成し遂げ，トンガの近代化をもたらした。彼はツポウ一世として立憲君主国を創設したのである。一時英国の保護領（1900～1970）となり，外交権を預けることにはなるが，国内的には独立を維持していた。

さてツポウ一世は首長制の下にあった平民をトンガ王の下に置くべく，18歳以上の男子に宅地として0.4エーカー，農地として８と1/4エーカーの土地を保有する権利を与えた。この制度によって，トンガは他のポリネシア社会に比べて核家族化が進展しているといわれる。こうした土地を利用した商品作物生産としてのカボチャ生産と日本への輸出は，1990年代には盛んに行われたが，現在は下火となっている。

立憲君主国といっても，王が大きな権力を掌握する制度となっているため，王族と一部貴族による専制政治を批判する人々が，1990年頃から民主化運動を行うようになった。その運動の高揚が2006年に暴動に発展して，首都ヌクアロファの商店等が焼き討ちに会った。未だ首都に残る火災跡は痛々しい。また経済で特筆すべきは，中国系のレストランが首都には乱立しており，また村落地域でも商店が多く中国系の人々の手で運営されていることであろう。

太平洋島嶼国の常としてキリスト教の影響は深いものがある。メソジスト系のトンガ自由教会のほかに，カトリックも大きな影響力をもつ。

換金作物の栽培を主たる収入源とする半自給自足経済の時代は過ぎて，現金収入への希求は大きいが，観光収入も満足ではなく，今日海外移民からの送金が主たる収入源となっている。現在の人口はおよそ10万人程度であるが，同数以上のトンガ人がニュージーランド，オーストラリア，アメリカ合衆国に居住していると言われる。

トンガ憲法では，男性と女性のそれぞれの地位は平等ではない。女性は土地を相続することができないし，新しく土地の使用権を申請することもできない。また，トンガ男性の外国人妻はトンガ国籍取得が可能であるのに対し，トンガ女性と結婚した外国人男性にこの制度は開かれていない。

これらの憲法上の不平等はトンガの慣習に基づくものであるという認識で，この国では国連の女性差別撤廃条約は未だ批准されていない（Maka 2005: 30-31）。

トンガとサモアとは同じポリネシア文化に属し，西欧接触以前から，トンガ，サモア，フィジーの3地域では，大型カヌーによるコミュニケーションがあり，婚姻関係や通商が行われていたことが知られている。婚姻関係と通商のパターンを分析したケプラーは，トンガの王族の家系において，サモアの女性を娶る記録があり，とりわけ第三の王朝ライン（第一ラインの傍系の傍系）はそれに伴いサモア女性の持参財のファインマットがもたらされた記録について言及している（Kaeppler 1978）。ファインマットは，*kie hingoa*（名のあるファインマット）として知られている。個別に固有名をもっているのである。サモアから入ってきたと伝えられるファインマットが王宮や貴族のファミリーに半ば骨董品的な貴重財として存在していることがわかっている（Kaeppler 1999）。

4）女性財の生産

サモアでもトガ財（編みもの等の財）は女性の生産物であるが，同様にトンガのコロア類（編みものとタパ）は女性の生産すべきものとされている。サモアに負けず劣らず，村落部の女性たちはタパやマットの生産に余念がない。これらの生産は大きく分けて2通りある。一つのカテゴリーは，国内のトンガ人や海外に移住したトンガ人が儀礼に必要としているもので，自分で儀礼に使う場合もあるが，それを売って換金することもある。町で政府の役人や会社等のオフィスで働く女性たちは，高等教育を受けている間にそのような技術を学ぶ時間を逸して作り方を知らないし，また知っていても作っている時間はないので，必要となったら購入しなくてはならない。彼女らはお金を持っているので，将来の必要性を考えて，割安だと感じたらあらかじめ購買しておくこともある。また海外移民の場合は，

写真２　土産物製作グループのディスプレイ。女性のためのNGOアロウア・マア・トンガの下部組織，2012年撮影。

作り方を知っていても材料の入手ができないので，必要に応じて購入[8]し，また必要を見越して購入のために来島することもある。

もう一つのカテゴリーは，観光客向けや海外市場をあてにした土産品の生産である。タパも土産品用には，A0サイズ以内からランチョンマットサイズの小さいもの，また壁掛けやウチワ，ランプシェード，アルバムなど[9]。また土産物ではないが，トンガ人として必ず必要なタオヴァラやキエキエ[10]もトンガ人が市場で購入するものとなっている。

トンガの女性たちは，これらのタパ類の生産，マット類の生産に大変熱心であるが，それらはしばしば共同作業で行われている。というのも贈答用のタパは，大変サイズが大きくて，一人で作成することは困難であるからだろう。そのような10数人からなる作業グループは村落地域に無数にある。

タパ[11]の製作をするためには年度始めに生産計画をたてる。樹皮の採取

から自分ですることもできるが，既に木からはがして乾かしたものが市場で売られている。あらかじめ家でたたき伸ばして紙のようになった白いタパを何枚も用意しておいて土曜日に集まる。かつては台紙となるタパを重ね合わせ，その上に表のタパを貼り付けていく作業を行っていたが，現在では下に洋裁に使う芯地を貼り合わせて作業をしていく。

筆者が見せてもらった作業グループでは８名が大きな座卓のようなテーブルに４名ずつ向かい合って座り，芯地を広げて糊を塗りその上に隙間がないようにタパを貼り合わせる。５メーターほどの幅で芯地を貼り合わせその上にタパを貼った後，テーブルに付けてあるヤシロープの上にタパを押しつけて染色をしていく。８名が作業を終えると片側によせてさらに新しい芯地やタパを貼り合わせ，大きいタパを作っていく。

こうして製作されたタパはあらかじめ指定されていたメンバーのものとなり，次の機会には他のメンバーのために皆製作に勤しむ。こうして作業グループを通じて交替で自分のタパを入手するのである。

一方のマット類は，パンダナス（タコノキ）の葉を平織りの斜めに編んで作る。マット作りに使えるパンダナスは4種類ある。その他にも異なる繊維がある。染色して編み方で絵柄を出すデザインや，縁取りの仕方など様々な作り方があり，形式がある（James 1988: 7）。タパの材料であるカジノキがもっぱらトンガタプ島でとれるのに対し，編み物の材料となるパンダナスは，ハアパイ諸島，ヴァヴァウ諸島，ニウアトプタプ島などに多く産し，マット類はそちらからもたらされる富となっているが，トンガタプ島でもファインマットを編んでいるところを見学することができた。

ファインマットは，キエという種類のパンダナスの葉で作るが，この点はサモアと一緒である。ただし，サモアのいわゆるイエ・サエ（良質のファインマット）が，パンダナスの葉の表裏はがした表面の内側を合わせて２枚重ねで作っているために両面とも艶があるのに対し，トンガのファインマットは，片面1枚のみで作られていることが多い。また編み材の幅も普通は５ミリ以上あるので，やはりサモアのファインマットが珍重されるだ

写真３　協同製作のファインマット。３人がかりで作業中。途中１名が交替した。トンガタプ島にて，2012年撮影。

けの理由はありそうだ。

ただし，目の詰まりかたやその結果の美しさには劣るものの，トンガのファインマットは著しく大きいものがある。これはサモアのファインマット作りが一人の編み手で作られるのが基本であるのに対して数人で１枚を編むものである。サモアでもパンダナスの葉の表と裏をわけずに大きく編む編み方がある。２人または３人の親子，姉妹，オバ姪のように気心が知れた間柄で編んだりすることはあるが，原則は１人で編む。しかし，トンガでは女性の協同作業グループで協同の作業で大きいマットの製作を行っている。

サモアのファインマットが最高の品質をもつという評価はトンガの貴族の女性の間ではよく知られた事実であるらしく，WiBFと契約を結んでファインマットを入手したという女性（複数）に会うことができた。同じ名前のパンダナスがあり，似たような技術をもっており，これだけ手工芸品

の製作に熱心なトンガ女性が，サモアのファインマットと同じものを作れないというのは不思議なことだ。ある貴族の女性は多分気候や土壌の微妙な違いで，葉の質が違うのではないかと述べた。しかし，教会組織を通じてサモア女性を招いて，ファインマットの作り方を伝授してもらうワークショップを開催しようと考えているという女性コミュニティ・リーダーもいた。

5）女性財の保持と儀礼

トンガではコロア財の管理は女性が行うことになっている。母からとりわけ長女に多くの財が譲られるということだ。貴族の間では，婚姻に際してファインマットを持参財として娘にもたせるというが，平民の間では，タパや大マットなどのコロア財を贈るもののファインマットの贈与は行わない。母が亡くなった後は長女にファインマットなど重要なコロア財が受け継がれるとのことである。適度なサイズのファインマットはむしろ，結婚式などのハレの行事に当たって，主役がまとうものとなっている。しかしそれは贈与するものではなく，晴れ着として見せた後は再度しまっておいて，次の機会に親族の誰かがこれをまとうことになる。母系ラインを通じて渡されるコロア財は贈与等の機会もあるが，その根幹となる財は家宝として受け継がれていくことになる。

サモアでは，格式あるファインマットを娘の結婚式で婿方に贈与しなくてはならない，あるいは親の葬式には最高級のファインマットが必要となる，また式を執り行った牧師にも相応しいファインマットを贈与しなくてはならない，といった贈与の義務に取り巻かれている。ファインマットを用意しなくてはならないコンテクストでは，それは直ちに贈与するべきものである。公式の贈与に当たっては，大変上質のマットは贈与者の元に返礼として返ってくるのが普通であるとはいうものの，親族一同で贈与することになれば，お返しとして帰ってきたマットが自分の元に再び帰ってく

写真４　サモアに教会の会議に行った際に，縁あって購入した骨董品のファインマット。2012年撮影。

るとは限らないからだ。親族中の格に応じて偉い人に分配されてしまうことも珍しくない。その場合，ファインマットの提供者は執着心のないところを見せるのがモラルとされるのである。このような経緯があるので，最高級のファインマットをもっていても，滅多なことでは他人にそれを見せず，贈与するギリギリの機会に至るまで隠しておくのが普通である。

一方トンガでは，晴れ着と一緒で，それほどまとうチャンスが多いわけではないが，ハレの場が終わっても持ち主が変わるわけではない。長らくサモアの調査に関わっていても，友人たちが秘蔵のファインマットを見せてくれることはほとんどなかったが，トンガでは知り合いになって２週間の60代の女性が，秘蔵のコロア財，とりわけファインマットを，しかもその中にはサモア産の骨董的なファインマットが含まれていたのだが，数枚を見せてくれたのである。コロア財を保持していることは女性としての誇りであるとのことであり，サモアのようにその所有権が曖昧ではない。コ

ロア財は女性の関心事として，男性はやや距離を置いて具体的話にはあまり加わらない。

海外の女性たちの間でもコロア財を保持することに関心が高い。海外移民の間では，プラスチックなどの新しい素材を使ってクロセ編みなどの技術を用いながら手芸品を作ることに熱意を燃やしている女性もいるものの，タパやマットの天然素材を入手することが難しい。それらの中には，トンガの特定の女性グループと連絡をとり，タパやマットの注文をした上で，里帰りをかねてそれらのコロア財を買いに来る移民のトンガ女性のグループがいるとの話があった。一方でアド＆ベスニアは，トンガ本国及びオークランドで，トンガ人質屋がコロア財を質草に融資をしている実態について報告している（Addo & Besnier 2008; Besnier 2011）。コロア財の商品化について語るこの業績は，大変興味深いトンガ文化の変容を語っている。コロア財を全くもっていないということは大変惨めなことである。しかしついにあらゆる現金を使い果たしてしまったあとには，これを質草にすることができるのだ。それというのもコロア財はそれ自体価値をもっているからである。

6）おわりに

サモアのファインマット復興事業は，ファインマットの製作に関してかなりの成果を上げているのに対して，これが儀礼交換の場面で利用されることが比較的少ない。政府の公式基準のイエ・サエとなると，大きな儀礼でごく少数が（1～2枚）使われることはあるものの，あとは大型粗悪品，イエ・テテレが大部分を占める。また，近年開発製作されているイエ・サエのような上質マットは，高くて手が出ないという話を多くのサモア人に聞く一方，なぜトンガでサモアの新しい上質ファインマットの人気があるのかという疑問は，この調査である程度解くことができた。

サモアでは贈与財として人の手から手へと回っていくファインマット

は，贈与の場面ではファミリーの威信を示すものではありながら，自分の所有でなくなる可能性を多分にもち，交換機会の一過性のものとなってしまう。トンガでは同様に貴重財ではあるものの，むしろ家宝として長く留め置かれる財であり，ファミリーの威信を示すために必要な財であったのだ。

また，きわめて類似性の高い文化をもつ2つの諸島群の間でも，似たような活動の中に，微妙な違いが観察できた点も収穫であった。サモアのファインマット製作グループは，1週間に一度の集まりが開催されるものの，作業そのものは大変個人的である。それに対してトンガの女性グループには協同作業を必要とする製作が多く見られた。しかし一方，土産品の製作も大変熱心であるが，これは個人的作業となる。現在トンガ政府が肩入れしようとしているのは，現金所得創出としての土産物製作である。

これまで筆者は自分のフィールドでのジェンダー研究をあまり行ってこなかったが，今回の研究を通じて，太平洋地域の女性たちが「伝統文化」内での役割分担を活性化することで，強力な現金収入へのアクセスを維持してきたこと，そうやって近年の世帯運営を支えてきたことに感銘を受けた。女性が夫より多い現金収入をもっていることはしばしばである。この事実は場を改めて，詳細に報告を行いたい。

【注】

1）この研究は，日本学術振興会科学研究費助成金をうけた研究「グローバル化する互酬性―サモア儀礼交換の新たな展開」（基盤C，平成23～25年度，課題番号23520999）の一環として行われた。トンガ政府内務省女性局には多くのNGOを紹介していただいた。記して感謝したい。また，レーリン・エサウ氏はじめ，面接調査に応じていただいた多くの方々にも御礼を申し上げる。

2）パンダナスの葉を干して細かく割き，手で編んで作る薄いゴザのようなもの。サモアのファインマットは目が細かくて有名であるが，ポリネシアの他の地域にも似たようなマットは存在していた。サモア語では，*‘ie tōga*（イエ・トガ）と呼ばれるが，政府内では2000年頃から，公式名称として，*‘ie Sāmoa*を用いることとなっている。トンガ語では，*kie Hamoa*とか，*kie hingoa*と呼ばれる。ここではそれらを総称してファインマットと呼ぶ。

3）カジノキの木の皮をたたき延ばして貼り合わせて作る紙と布の間のようなもので，樹皮布ともいう。木綿地が入ってくる前のポリネシアでは広く衣料として用いられた。

4）体に塗布するため，香りをつけた後に使用する。

5）１ターラーが，2013年１月末には40円程度。

6）サモアでは，一般的互酬性のモラルがまだ生きているので，大金が入ったときには周囲の人々に分配することが期待されている。

7）粗悪品では葉を２枚に分けるプロセスは行われていない。

8）海外移民コミュニティにはそうした品々を売る店が存在している。特に最大規模の移民コミュニティをもつオークランド（ニュージーランド）には，常設店に加えて週一の市場に開店する店があり，また質流れの品々を扱う質屋も存在する。

9）木彫やココナツシェルの細工物などは男性の作る土産品とされている。

10）*ta‘ovala*は腰巻きに用いるマットで正装，*kiekie*はウェストに巻いたひもから下がる房状の飾りで準正装として用いる。

11）トンガでは*hiapo*と呼ばれる植物（カジノキの一種）の樹皮を用いる。完成品は*ngatu*と呼ばれる。

【文献】

山本真鳥（2005）「サモア社会における女性の仕事の復興―市場経済下のジェンダー役割分担の保守と変容」原伸子編『市場とジェンダー―理論•実証•文化』pp.295-313，比較経済研究所研究シリーズ20，法政大学出版局。

山本真鳥（2007）「エスニシティと『貨幣』――国境を越えるサモア人の交換とアイデンティティ」春日直樹編『貨幣と資源』pp.109-143，資源人類学シリーズ，東京：弘文堂。

山本泰・山本真鳥（1996）『儀礼としての経済―サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ』東京：弘文堂。

Addo, Ping-Ann and Niko Besnier (2008) When gifts become commodities: pawn shops, valuables, and shame in Tonga and the Tongan diaspora. *Journal of the Royal Anthropological Institute* [n.s.] 14: 39-59.

Besnier, Niko (2011) *On the Edge of the Global: Modern Anxieties in a Pacific Island Nation*. Stanford: Stanford University Press.

James, Kerry (1988) *Making Mats and Bark Cloth in the Kingdom of Tonga*. Australia?

Kaeppler, Adrienne L. (1978) Exchange patterns in goods and Spouses: Fiji, Tonga and Samoa. *Mankind* 11(3): 246-52.

Kaeppler, Adrienne L. (1999) *Kie hingoa*: Mats of power, rank, prestige and history. *The Journal of the Polynesian Society* 108(2): 168-232.

Maka, Lia (2005) Ta fihi: From tangled web we weave anew. Arlene Griffen ed. *Lalanga Pasifika: Weaving the Pacific--Stories of Empowerment from the South Pacific*, pp.21-102. Suva: IPS, University of the South Pacific.